

KAWADA
E
PAPER BACK

小田 実 長篇小説

牙
リ
カ

河出書房新社

長篇小説
アメリカ
小田 実



Kawade Paperbacks 13

アメリカ

表紙絵 栗津 潔

表紙構成 原 弘 (NDC)

昭和 37 年 11 月 1 日 初版印刷

昭和 37 年 11 月 10 日 初版発行

定 価 280円

著 者 小 田 実

発行者 河 出 孝 雄

印刷者 草 刈 親 雄

発 行 所 東京都千代田区 株式 河出書房新社
神田小川町3の8 会社

電話 東京(291)3721~7

振替口座 東京 10802

©1962

印刷・製本 中央精版

落丁本・乱丁本はお取り替えます

長篇小説

アメリカ

チャーレス——チャーレス・ハーバート・ローガンは画家だった。どの程度の絵描きなのか、私は知らない。二十九歳。代表作は、彼自身のことばによれば、《人間・このまるはだかなるもの》

彼はそれをバリで描いた。いや、「描いた」などと言っているのか。

三メートル四方ほどの壁面に、直径、長短さまざまなコンクリート製の円柱が、円型の切り口をこちらに見せて、一面にびっしり植え込んでいる。円柱の配列には、秩序・法則・脈絡、そういった七面倒くさいものは何もなかった。すくなくとも、作者以外の人間には、きわめて無難作に並べられているように見えた。

一見して、不安であった。円柱は直径、長短ともにさまざまなものだから、そこから安定感が生まれるべくもない。おまけに、切り口の角度がそれぞれ違った。あるものは神経繊維の先端のように鋭角に尖り、あるものは眠たげにべっぴんと平べったいまんまるの切り口を見せていた。そして、すべての切り口が、コンクリートのむき出しの地肌そ

のままであったから、粗くザラザラと乾ききっていた。

これが「絵」なのか。

いや、これのみでは十分でなかった。チャーレスの説くところに従えば、「絵」を完成させるためには人物が要った。試みに、その円柱群のまえに一人の人物を立たせて、十メートルほど後退しよう。そうすると、人物が「絵」の一部となって見える。と言うよりは、「絵」の不安の一部となって見える。ある円柱は彼を芋刺しにせんとし、ある円柱は大きく頭上におおいかぶさり、あるものは彼の横腹に記憶のように突出し、あるものは彼の股ぐらを、ていねいに、また淫猥になめた。

これが、その人物が《人間・このまるはだかなるもの》なのか。

そして、チャーレスはこう言いたいのだろう。その彼があなた自身である、と。十メートルの距離をへだてて「絵」を見ているあなたが自分自身を、「絵」のなかに、「絵」の不安のなかに、その一部となつてすでにあまりにも入り込みすぎている自分自身を見いだすのだ、と。

そうかも知れない。私は、彼がそう言ったとき、ザラザラしたコンクリートの感触を実際肌と感じた。私はたしかに自身の姿を円柱群のまえに認めたのであるが、同時に、アメリカの青年によくあるように、すでに頭髮が薄くなり、ロイド眼鏡をかけた、ズングリした体つきのチャーレスの姿をも明瞭にそこに認めた——

とは言っても、私はその「絵」の実物を見たわけではなかった。写真もなかった。

「写真なんか……」彼は鼻でわらった。「フィルムがあったら、そのとき、おれはフィルムだって食ったね」

彼のバリでの貧乏ぐらしの目撃者ポップ・バージェが、いつか言ったことがある。

「バリでのこいつときたら、まったく《人間・このまるとは言っても》だったよ。こいつほど、そのことばにぴたりするのは、そのとき、まあ、いなかったね。作品より作者が泣かせたねえ。ケチで高名なおれまで、なければ千フラン札を作者先生に呈上したんだからな」

「ところで、その知られざる傑作は、どうなったんだ」

私が口をさしはさんだ。チャーレスは肩をすくめた。ポップは妙な顔をした。

「消えたよ、きれいさっぱり。この地上から消失したよ。あとかたもない」

いやにサバサバした口調で、チャーレスが言った。

金のないチャーレスには、バリでアトリエを借りる余裕はなかった。ある日、郊外を散歩しているときに、かっこいい倉庫を見つけた。その一部を格安に借り受け、彼はそれをアトリエにした。円柱芸術を始めたのも、そこでだった。《人間・このまるとは言っても》がやっと完成したとき、立ち退き命令が来た。彼は倉庫の借り賃をずっと滞らせていたのである。彼には家賃を払う金も、円柱芸術を

移動させる金も、そのどちらもなかった。いさぎよく、彼は愛児をたたきこわした。

「まあ、自分の手でやったから、思いきりはよかったな。やっぱり、惜しかったけどね」チャーレスは、一瞬、だまった。しかし、すぐつづけた。「だがね、負け惜しみじゃないが、あれはあれでよかったと思うね」

何故なら、彼の表現を借りれば、「絵」は消え去ったあとでも作者の想像力のなかに確乎として存在し、確乎として存在するどころか、ふくれ上り、ふくれ上りして、その外側にまではみ出して行く。彼はもう今では円柱芸術はやめにして、絵具を巨大なキャンパスに、あるいは叩きつけ、あるいはうず高く盛り上げるようにして、ふつうの絵（とは言っても、いぜんとして、わけのわからないしろもの）を描いているのだが、すべてが、そのふくれ上り、はみ出しの所産であった。

「どおりで、あなたの絵はキャンパスからはみ出して、床を汚すんだね」

私が言った。ポップが大声で笑い、チャーレスは苦笑した。苦笑すると、頭髮の薄い彼も、少年のようににはいかに見える。私はそんな彼を好んだ。

チャーレスと私が、この古ぼけたあばら家にひき移って来て共同生活を始めるのとほとんど同時に、チャーレスのアトリエにあてられた広間の床は、絵具のとぼちちりで極彩色にきわめて華麗に汚れ始めた。これをもチャーレスは

「美」であると主張するだろうか。ロイド眼鏡の奥で人なつっこい眼をしばたかかせながら。

大きな男ではなかったが（背丈は私より少し低かった。もっとも、私は日本人としては長身のほうで、たしかアメリカ人の平均身長より上であった）、骨格が太く、ぜんたいにガッシリとしていて、力があった。実際、彼はよく力を誇示したがつた。これはアメリカ青年一般の病弊であるのかも知れない。《show the muscle》（筋肉を見せびらかす）という表現を、私はアメリカに来てはじめて知った。

この南部の小都会クレイトンには、ときどき市が開かれ、近からお百姓が集まって来た。お百姓といつても、日本の彼らを想像しては誤りである。みんな、もちろん、車で来た。キャデラックで来るのもいれば、家用飛行機を駆って来たのだっているかも知れない。

ほかに娯楽のない田舎のことだ、市はたいへんな賑わいだった。日本の遊園地の博覧会に見本市を加えて二で割ったものと思えばよい。子供連れで来て、展示場をぶらつき、遊戯場のメリー・ゴー・ラウンド、電気自動車、木馬、その他もろもろの動くもの、動揺するもの、激動するもの（乗りまたがり、立ち、バブコーン、アイスクリーム、コカ Cola、ホットドッグ、ハンバーガーのたぐいを腹にぐいぐい押し込む。太陽は輝やき、汗は流れ、むやみに

腹がへり、そして喉がかわいた。

遊戯場の片隅に、その器械はあった。ばかに単純な器械である。柱が一本立ち、そのねもとにテコがあった。テコの一端を力自慢の男がハンマーで叩くと、鉄球が柱にそって昇る。一回がいくらだったか。力自慢はよくそれを試みる。彼はガール・フレンドに、見物の鼻タレ小僧たちに、頭上をカアカアと、たぶん「骨折り損のくたびれ儲け」と高らかに鳴いて過ぎるカラスたちに、いや、誰よりも自分自身に彼の「筋肉を見せびらかす」のであろう。柱の尖端まで鉄球が首尾よく達すると、そこに装着した鐘にぶちあたって、気持のよい音が鳴りひびいた。

柱には区分けがしてあった。上から順に――

よい腕だ／もうちょっと／かなりのでき／半分来たぞ／なまけ者め／弱腕居士／もっと豆を食べろ／お嬢さん／ミスター・霧／等々――

器械のまわりには、かなりの人がいた。三、四人の力自慢を除けば、大半が子供だった。小さいのは鼻タレ小僧、大きなのは高校生らしい少年少女。女の子の喚声のなか、少年の羨望の視線のなか、鉄球が上下し、鐘がときどき鳴りひびく。私も見物人のなかに入ってしまった。

シャツを脱いで半裸になった男が、懸命に鐘を鳴らしているさなかつた。「たいしたものだぜ、これでもう八回なんだ」そばのニキビ面の肥った少年がそうささやいてくれた。汗がはだかの背中を流れ、そして匂った。

それがチャールスであった。彼は私を認めると、いかに
も一仕事終えたというような明るい表情で笑った。

「来ていたのかい、サキ。もっとも知らなかった。ずっと
見ていたのかい？」

「いや、残念ながら、いま来たばかりだ」

見物人たちがいっせいに私を見た。その視線は、はじめ
に驚愕、ついで好奇のそれになる。チャールスという彼ら
の力の英雄ヘラクレスと、私という東洋の異邦人とのあ
いだに、いかなる関係があるのか、あり得るのか——彼ら
の視線はそれを追いつめていたのだろう。さっきのニキビ
面の肥った少年までが呆れはてたように私をみつめている
のを見ると、私にささやいたときには、私が何ものである
か、まだ認めていなかったのだらう。それほど、彼はヘラ
クレスの美技に酔っていたのにちがいない。「チャイニ
ーズ？」「チャイナマン？」「ノー・ジャップ」「ジャパニ
ーズ」——ささやきが起った。私はそのすべてを無視し
た。私はもう、そうしたささやきには十分に馴れていたの
である。

「《誰がために鐘は鳴る》んだい？」

私は大声で呼びかけた。チャールスは大きなタオルで無
雑作に体を拭いているところであった。彼とはそれまでに
三度会ったきりだが、このふしぎな器械は、二人のあいだ
の垣根を一挙にとりはらい、おたがいをぐっと近づけた感
があった。彼はゆっくりとアロハ・シャツを身につけ、身

づくろいをすませてから、おもむろに答えた。

「自分自身のために、そして、ソビエト人民共和国のわが
同志諸君に。とにかく、われら合衆国民は、自由を護る
ために、常に強くある必要があるからね」

高校生らしい少女が二、三人、甲高い声をあげて笑っ
た。ソバカス、ニキビ、それともう一つ、アメリカの高校
生を特別に印象つけるものとして、濃くはいた口紅。それ
なりに、彼女らはかわい。

「しかし、たぶん鐘はフルシチョフ氏のためにではなく、
この女の子たちのために鳴ったのであらう」

私はとぼけた口調で言った。彼は笑い、私の肩をどやし
つけた。痛かった。たしかにここでも彼は、彼のヘラクレ
ースであるゆえんを示したのである。

そのあと二人で歩いた。「お化け屋敷」のまえで彼が言
った。

「日本にもこんながあるかい」

「ある」

射的のまえで彼が言った。

「日本にもこんながあるかい」

「ある」

綿菓子屋があった。アメリカにも綿菓子屋があるのだ。
いや、あれも、もとはといえば輸入品なのか。綿菓子はい
つも妙に私の郷愁をそそった。子供のときの緑日の記憶が
よみがって来るのだ。

「日本にもあれがあるぜ」

私は妙に勢い込んで言った。チャールスは、ふしぎそうに私を見た。

六十がらみの爺さんが売手だった。爺さんはゆっくり器械を操作する。みるみる、ふわふわとしたものが、爺さんのもつ箸のまわりにまきついて行く。《Cotton Candy》という横文字を除けば、日本のとまったく同じだ。子供が四、五人、列をつくって待っている。口をあんどぐり開いて、綿菓子という奇蹟の出現を待っている。

「子供はどこでも、みんな同じだよ」

私が言った。チャールスはうなずく。

「食べるかい、われわれも」

私は「イエス」と言おうとして、ふと、かぶりをふつた。私はあることに気づいたのである。

「実際、子供はどこでも、みんな同じだね」

チャールスが同じことを言った。

「まあね」

私は浮かぬ返事をした。

綿菓子屋の背後に柵があり、そこで市の敷地は終わっていた。「子供はどこでも、みんな同じだ」ということばのどく範囲は終わっていたと言ってもよい。そこから先には、べつの一つの現実がひろがっていたのだから。

子供が六人、柵の外にぼんやりと立っていた。こちらを眺めている。にぶい視線だった。いちようににぶい——い

や、私は、もうちょっとのところで、一人の少年の視線を見すぐすところだった。

（何言ってるんだい）私には少年がそう言ったように思えた。その視線がそう語っている。汚ない少年だった。ほかの五人が小ざっぱりとしているのに、彼だけはいやに垢じみたシャツを身にまとっている。貧しいというよりは、たぶん、少年には母親がなくて、それで、こんなにどことなく投げやりなのだろう。少年の頭の上には、強大でむき出しの父親の愛情だけがおおいかぶさっていて、彼を下から支えてくれるはずの優しい柔らかな母親の愛がない。未来の問題児だな——私は思った。十三歳。私は彼の年齢をそうふんだ。

柵ごしに私は少年を見、少年も明らかに私を見た。

「ジャップ」

はつきり少年は言った。

さっきの見物人たちの「ジャップ」と、この少年の「ジャップ」のあいだには、微妙な差がある。すくなくとも、そのことばを言うときの表情には——私は直感的にそれを感じた。その差異が何を意味するのか、私には、そのあと、長い間わからなかった。

「《ジャバニーズ》と言えよ」

私は少年に言った。それはとがめだてではなく、一種の呼びかけであった。私はこんなふうにして、子供と大人の双方にわたって、友人、知己をつくった。

少年は答えなかった。表情をかえていた。いや、少年は表情をなくしたのだ。さっきの六人の少年のなかで彼だけには表情があったのだが、それが私のことばを契機として、一瞬のあいだに、他のみんなと同様のにぶい捉えどころのないものにかえられてしまっていた。もう、彼と他の五人とのあいだには、差異はなかった。六つの無表情が一つの壁となって、柵の外にあった。何十年も昔から、そこにそうやって動かずにあるように、確固と、そして同時にものうく、だらけた姿勢で存在していた。

「きみの名前は何というのだ」

少年は答えなかった。私は問いをくり返した。

「リチャード」

少年は一言答えた。

「苗字は？」

答えはなかった。私は二度くり返した。ただ、沈黙が壁からはね返ってくる。

「おじさん、あんな奴らに訊ねるなよ」

さっきのニキビ面の肥った少年が、いつのまにかそばへ来ていた。彼は、あれから、見えがくれに私とチャーレスのあとを追って来たのであろう。太い腰ではち切れそうになったズボンのポケットに両手をつ込み、アゴで六人のほうをしゃくってみせた。

「They are NIGGERS」(あいつらはニッガー)《クロンボ》なんだ)

私はうなずいた。と同時に、激しい羞恥が足先から急速に上昇して来るのを私は感じた。

「行こう」だしぬけにチャーレスが言った。「話があるんだ」

私たちは歩き出した。私はホッとした。

チャーレスの話というのは、それは耳よりな話であった。チャーレスの友人が今度北部へ帰る。友人は町外れに、めつばう安い家を借りていた。平家だが、ぜんぶで四室ある。

「ただしボロ、それも幻想的^{フアンタスティカル}にボロだよ」

建つてもう三十年になる。たとえば、トイレットは棒で力いっぱいなぐりつけないと水が流れない。

「このあいだ、きみは寄宿舎を出たいと言った」

いっしょに住まないか、と言う。家賃を折半すれば、費用は寄宿舎と大差ない。

「とにかく、家だぜ。サキ、家だぜ」

彼は歌うように叫んだ。私はうなずいた。

「ほかに誰か来るかい？」

「いや、きみだけだ。もちろん、きみが臨時的にガール・フレンドにベッドを提供するのに、おれは異議を申し立てない。そういうことはおたがいさまだからね」

私は、きまじめにうなずいた。

「とにかく、家なんだからね」

「《ホーム・スイート・ホーム》かい」

私は軽口を叩いた。それから、「わるくないな。いっしょに借りよう」と言った。

チャーレスは手をうってよろこんだ。こういうとき、西洋人の挙動は、氣にさわるぐらい大げさだ。

「ワンダフル、ワンダフル！」

彼はくり返して言った。私は几帳面に、その「ワンダフル！」の二つ二つに、うなずいた。

興奮がしずまり、同時に市の出口までさしかかったとき、チャーレスはふと言った。

「奴らは美しいね、そうだろう」

「誰が？」

「あの黒人の少年たちさ」

北部人でインテリの彼は、むろん、《ニッガー》(クロンボ)というようなことばを使わなかった。《ニグロ》という、それよりは少しましなことばも用いなかった。彼は折目正しく、こういう場合のもっとも穏当な表現である《colored》(色がっている)ということばを使用した。

たしかに彼のような北部人のインテリは、そんなふうなことばを用いるのであろう。しかし、私は、何かそこに私に對する心づかいのようなものを感じた。

「そうだね……Do you like them？」

私はあいつちを打ち、それから、自分でも思いがけないことを訊ねた。Do you like them?——おまえさん、彼らが好きかい？ 私は《chem》に力を入れた。無意識的に

そうしていた。彼ら——少年たちのことであり、少年たちにかざられたことではなかった。つまり、色が、ついている、彼ら——

「おれは美しいものが好きなんだ」

チャーレスはくったくのない表情と声で答えた。彼が私の問いの意味を理解していないことは明らかだった。突然、私は激しい焦躁を感じた。距離があり、その距離ははじめから零であるがゆえに越えられない距離なのだ。

「そうか、きみは美しいものが好きか」

「イエス」

チャーレスは言い、そして歩いた。私も歩いた。

2

チャーレスは北部人^{ナザリ}だった。ニュー・イングランドの田舎町で生まれ、エール大学の美術学部を出た。兵役をすませたあと、パリへ行った。

パリには二年半いた。金はどうしたんだと訊くと——

「いつか面白い漫画を見たことがあるよ。シャンゼリゼの喫茶店で、アメリカ人が四、五人集まって話をしているんだね。一人が言う。『おれはフォードで来ている』他のやつが言う。『おれはロックフェラーで来ている』もう一人が『ぼくはフルブライトで来ている』……判るかい、この連中は、みんな、フォード財団やらロックフェラー財団やらフルブライト留学生プログラムから、お金をもらって来

ているというわけなんだな。これは今日のアメリカの流行だよ。みんながそう言う。すると、見すばらしいふうていをしたのが、横から口を出すんだ。『おれはおれ自身で来ているんだ』ってね」

チャーレスは口をすぼめて、皮肉に笑った。

「あんたはどうなんだい。あんたはあんた自身でパリへ行ったのかい」

彼はうなずいた。

「いろんなことやったよ。会話の先生、ボーイ、似顔絵描き、英字新聞の立ち売り、ジゴロ、無為徒食……」

「何故、パリへなど行ったんだ。あんたの傑作《人間・このまゝはだかなるもの》を作るためかい」

「なに、流行だよ。アメリカ人は、すべて成年に達すると、ヨーロッパへ行かなければならないと考える。何故そんなふうに考えるか、これは世紀の謎だね。きみ、知っているかい、アメリカの若者がパリへ着くと、まず何をするか」

「エッフェル塔へでも昇るのかい」

「それはお上りさんのやることだよ。観光バスにつめこまれて、右はセーヌ河、左は凱旋門、オー・ワンダフル、スブレンディッド！ と叫ぶ善男善女のやることさ。お上りさんでない連中は……」

「すくなくとも、自分でそうでないと信じている連中は……」

「皮肉を言うなよ。とにかく、そういう連中は、パリに着くとすぐ本屋へ駆けつける。そこで、パリで発行されてアメリカやイギリスでは発禁になっている《不潔な本》^{グライイック}を買いたいさる。たとえば、ヘンリー・ミラーだ。このあいだ、きみが読んでいたのだって、あれはおれがパリから密輸入して来たものなんだ。わかるかい、おれの言う意味が……アメリカってところには、まだまだ、そんなところがあるんだな」

ヘンリー・ミラーといっしょに、彼は、脳細胞のなかにいろいろなものをぶちこんで帰って来たのだらう。アメリカに戻るるとすぐ、ニューヨークのスラム街に居を定めた。種々雑多な職業を転々とした。最初はよかった。あるカレッジで絵を教えたのである。ふた月でクビになった。教頭と喧嘩したのである。トラックの運転手になった。レストランの給仕になった。西部物専門の出版社にやとわれ、彼の表現を借りれば、「ピストルと保安官とインディアンに明け暮れた」こともあった。日本で言うなら、チリンチリンのゴミ屋さんにもらった。（ただし、アメリカのゴミ屋さんはチリンチリンなどという風流なことは一切ない。夜半、うしみつどき、突如としてゴミ屋をのつけた巨大な自動車が見われ、轟然とすべてを持ち去る。つまり俳句と叙事詩の差であらう）

ある画廊で開いた個展が運のつき始めであった。ニューヨーク・タイムズがかなりよい批評を書いた。もつとも、

記者が隣りの画廊へまちがって入ったからだという説もある。これは、チャールス・ハーバート・ローガン氏の説だった。

絵が売れた。いろんな経費を引くと、三〇〇ドルが手もとに残った。彼は旅行に出た。南部へである。それが、彼のかねてからの懸案であった。

ある町に来ると（その町名をきくと、彼は「忘れた」と、しごく単純に答えた）、ここはウィリアム・フォークナー氏の居住するところであるという。彼は会ってみる気になった。

チャールスは画家でありながら、あってもべつにかまわないわけだが、文学好きで、なかでもフォークナー氏は敬愛する作家であった。氏は文学青年などに会わないので有名な、あるいは、悪名高い作家である。こういう男に会うのこそ、面白いではないか。

町でぶらぶらしていると、フォークナー氏の知人だと称する男が現われた。散髪屋である。氏をよく知っているという。

「なにしろ、あの方はあつしの先生だったんでさあ。今でも、ロオタリ・クラブでおつきあい願っていますからね」

彼は心やすげに言った。フォークナー氏が散髪屋の先生だったというのはどういふことか。それに、氏がロオタリ・クラブのメンバーであるなどという話も寡聞にして知らない。しかし、一業種から代表一人という原則をもつ

ロオタリ・クラブのことだ、作家が入っていても、べつにかししくないだろう。氏は名うてのつむじ曲りだ。世評の裏をかくてロオタリ・クラブの会員におさまり、きまじめな顔でフォーク・ダンスでも踊っているかもしれない。フォーク・ダンスのまっさいちゅうに、氏に質問をぶつけてみる。「えーと、先生のあの難解きわまりない文体は、この軽快なるリズムの所産でありますか」フォークナー氏は手を叩いてよろこぶにちがいない。それとも、ヘラヘラ笑うか。

チャールスは散髪屋といっしょにロオタリ・クラブのパーティーに出かけた。

「この方がフォークナーさんです」

紹介されたのは、腰の曲った爺さんだった。もう八十をすぎているにちがいない。いつのまに、フォークナー氏はこんな年をとったのだろう。「あなたはこの散髪屋氏を教えたのですか」「イエス、彼はきわめてできのよい生徒であった」「ところで、あなたはどこで彼を教えたんです」「散髪学校でだよ」老爺は、何をこのトーヘンボクめ、判りきったことをきくのか、というような顔をした。作家のフォークナー氏ではなくて、散髪学校の先生のフォークナー氏であったわけだ。今は引退して、町でドラッグ・ストアを開業しているという――

「あんたはフォークナーの写真を見たことがないのかい？」

私は訊ねた。

「おれは記憶力がダメなんだ」

「だから、絵描きになったんだろう」

チャーレスは、彼が予想したフオークナア氏のようにヘラヘラ笑った。

その代り、そのパーティで、偶然、モンゴメリ氏に再会した。彼は南部の大学の先生であった。それも、えらい先生で文学部の部長が何かをしていて、チャーレスに言わせると、「ばかだが、いや、ばかだから、その点において、よい人」であった。

チャーレスはモンゴメリ教授とパリで出会った。金のないチャーレスはアメリカ人の泊る高級ホテルのロビーに現われては、フランス語の喋れない善男善女、紳士淑女、爺さん婆さんのガイド役を買って出、それでタダメシと小遣いにありついていたのである。モンゴメリ教授と会ったのも、そういう機縁からであった。

「パリの庶民の魂を知りたい」

教授はおごそかに宣言した。チャーレスはモンバルナスの自分の下宿に連れて行つた。

「ユトリロだ」

教授は、チャーレスの傾きかかったオンボロ下宿の外観を見て嘆声をあげた。いろんな奴に会わせた。まず下宿の主のウジ虫婆さん。次いで、そいつの妹の毛虫オールド・ミス。隣室のゲジゲジ保険外交員。向いの室のレストラン

の青虫ウェイトレス。三階の事務員。お針子――

「しかし、何がいちばん彼の印象に残ったと思う？」

「……………」

「おれの下宿の洗面所で、湯が出なかったことだよ。こんなところに、きみはよく住んでいるな、と言ったね。ユトリロだからな、とおれは答えた」

モンゴメリ教授は再会をよろこんだ。

「パリはすばらしかった」

チャーレスの顔を見るなり言つた。彼はチャーレスの個展の成功を知っていた。「インテリだからね、ニューヨーク・タイムズでもとっているんだろ」チャーレスはそう言う。

乞われるままに住所を教えた。南部旅行を終えてニューヨークに帰つて来ると、先まわりして一通の封書がモンゴメリ教授からとどいていた。教授の大学へ美術の先生で来ないかというのだ。教授の大学K――大学にも美術学科があつて、そこで実技の講師を求めている。それに就任しないか――

「あんたの代表作、例の《人間・このまゐるはだかなるもの》を教授が見ていたら、教授はあんたを呼んだと思うかね」

「二つの可能性がある。やとわなかったか、それとも精神病学の貴重な実例として、月給倍額でやとったか」

チャーレスは引き受けることにした。南部でしばらく遊

ぶのも悪くないし、第一、月給四〇〇ドルは、彼にとつて、それは天文学的に大きな金額であつた。

「なにしろ、おれは、六〇ドルから一〇〇ドルのあいだで暮らしていたんだからな。ロックフェラーになつた氣持だつたね、はじめて四〇〇ドルを貰つたときは」

K—大学はL—州の小都会クレイトンにあって、南部の名門大学としてきこえている。「南部のハーバードというところだ」私がそう言うのと、「いや、エールだ」チャーレスはエール出身者らしく、几帳面に訂正した。それでいて彼は、母校のことをいつもくそみそに言っているのだが。いや、彼はきつと、このK—大学はエール大学と同じように、学者バカの集団収容所だと言いたいのだろう。

K—大学に来てみると、パリで知り合つたポップ・バージェが英文科の講師をしていた。ポップはロシア系のユダヤ人で、詩人志望の文学青年であつた。小柄で、むやみと毛深い男である。日本の高名なある小説家は胸毛にあこがれ、自らの胸毛の貧弱さを嘆じたといふことだが、彼などはポップのそれを植毛してもらつたらよいと思われる。あんなにも繁茂した胸毛を見たことがない。私は、チャーレスとポップとよく泳ぎに出かけて、いつも目をみはつた。「もう一人、つけ加えるべきだな。K—大学へ来て、会つた人間は」

チャーレスは片目をつぶつて言うだろう。私は答える。「そうだ、あんたはえらい人に会つたよ。日本人サキこと

川崎登氏……」

それは、つまり、私だ。

私の経歴を、ここで簡単に書いておこう。いつか、チャーレスもそれを訊ねたことがある。そのときの一問一答を再録しておこう。

「生まれは？」

「大阪だ。日本のシカゴだね。工業都市。煙の都。シカゴが無限に汚なく騒々しく、そして無限に美しいごとく、大阪も無限に汚なく騒々しく、そして無限に美しい」

「いつ？」

「一九三〇年だから、チャーレス、あんたより三つ下だ。つまり、当年とつて二十六歳というわけだ」

「家族は？」

「オヤジはいない、死んだ。母親はいる。兄が一人、姉が一人。いちばん末がサキ君だ。その他、妻もいない。子供もいない。目下、恋人もいない」

「すくなくとも、現在、ほんの瞬間的な現在についてはね」

チャーレスはニヤリとした。

「あと何を訊いたらいいんだ、めんどくさいな」

「宗教は『ZEN』ただし、おれは何も知らんね。家のほかの連中も何も知らぬ。つまり、家代々、そうだったというのにすぎぬ。生活の信条、これはない。理想、社長になること。それがかなわぬなら、一生眠りつつけること。そ

れで、おれは眠ってばかりいるんだ」

「日本で何をしていたんだ？」

「サラリー・マン。大阪の商社会社の社員。会社に入ったのも、べつに理由ないな。就職試験のとき、実は新聞社と商社会社と二つ受けたんだ。どっちも外国へ出られるチャンスがあると思ってね。チャーレス、あんたには判らんだらう、日本の青年がどれだけ外国に出たがっているかってことが。たいへんなことなんだぜ、日本人が海外へ出るのは……」

「フム」チャーレスは氣のない返事をした。「しかし、きみはアメリカへ来た」

「そうだ、来た」

「何のために？……おや、これはきみがいつか訊ねた質問だ。何のために、ぼくがバリへ行ったかってね」

「そして、あんたは、流行だから、と答えた。おれも同じ答えを言っておこう。外国へ出るのが、とにかく日本を脱け出るのが、すくなくともそんなふうにしたがるのが流行だ、と」

「そうすると、行先はべつにアメリカでなくてもよかった、ということになる」

複雑な氣持が私の胸のうちに渦まいた。私はその氣持を茶化し、それよりほかに、氣持を処理する方法はなかった。

「いや、アメリカだよ、アメリカでなくてはならなかった

んだ。世紀の大画家チャーレス・ハーバート・ローガン氏に会うために、はたまた、一つ屋根の下に住む光榮に浴するのためにね」

「もういいよ」

彼は手をふった。私はチャーレスがついでくれたジンを一杯飲み干し、それから、自分の経歴の無味乾燥な事実の羅列を心のなかで始めた。

新聞社と商社会社の入社試験を受け、結局、私は商社会社に入った。それも、私の意志によつたのではない。就職難のころだったから、先に合格が決定したほうに決めなければならなかった。

会社は二流の上、戦後派の新興会社だった。戦前はチッケンボケな個人商店。それを今日あらしめたのは、ゴマスリ重役たちが平素いつものように、社長がそれを受けて鷹揚に磊落に否定するように、銀行からむかえられた入り婿社長のおかげだった。銀行出身にかかわらず、いや、それゆえに銀行を追われたのであろうが、社長には豪傑肌のところがあつた。そういうことを自分で十分すぎるほど意識していた点でも、彼は典型的な日本財界の豪傑だと言つてよい。私は遅刻し、サボリ、ズケズケと上役にものを言い、いばり、いわば破れかぶれにやつてのけながら、有能で前途有望な若手社員だった。すくなくとも、そういうことになっていて、社内での評判はふしぎに悪くなかつた。

「You are smart.」